Footprint
フットプリント
写真資料調査部会発行
H28.08.04
2016年
第21号

被爆71年ナガサキ原爆写真展　8月1日～8月15日

新作　幅5m爆心地の大型パノラマ写真
国指定「史跡」となった原爆遺跡5か所紹介

被爆70年の昨年、長崎市立図書館で開催した「ナガサキ原爆写真展」は市民の関心が高く、大きな成果を上げることができました。写真資料調査部会では今年も「被爆71年　ナガサキ原爆写真展」を開催しています。

会場は国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館、会期は8月1日～8月9日までの9日間です。（10日からは国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館が引き継ぎ8月15日まで開催）

この写真は被爆から1ヵ月後、9月18日に米軍が撮影した写真です
今回の写真展では被爆直後の長崎に生きる人々の姿を集めました
写真資料調査部会では被爆前後の長崎に関する写真を国内外から収集し分析しています

被爆71年 ナガサキ原爆写真展

2016年 8月1日（月）　13時　～ 18時30分
8月2日（火）～ 8月9日（火）　8時30分 ～ 18時30分

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館　地下2階　交流ラウンジ

入場無料

主催：(公財)長崎平和推進協会 写真資料調査部会
共催：国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
協力：長崎原爆資料館
お問合せ：
(公財)長崎平和推進協会 写真資料調査部会 Tel：095-844-9922

今年の写真展では長崎市が取り組んでいるアメリカ国立公文書館での長崎原爆関連写真の収集事業で入手した写真を主に展示します。今年の目玉となるのは、幅5㍍の特大パノラマ写真。10月中旬、長崎を調査した米国戦略爆撃調査団が撮影したものです。爆心地に立ち360度を見回したものですが、写真資料調査部会ではこの一部、竹の久保町・鎮西中学から城山国民学校、長崎刑務所浦上刑務支所の丘、松山橋までのおよそ1キロの範囲を写した6枚の写真を、長崎平和推進協会事務局の協力を得て、地元の美術専門業者に依頼し、幅5㍍高さ80㌢の特大パノラマ写真に仕上げました。

原爆投下直後、爆心地・浦上一帯は“色がない無色の街、音がない無音の街、そして人影が消えた無人の街”と表現されましたが、パノラマ写真を見ると食糧配給所も建っており、やっと人の姿が戻り生活が始まったように思われます。

今年の原爆関連のニュースで最大のものはなんといってもアメリカ・オバマ大統領の広島訪問でしょう。会場には長崎新聞、西日本、朝日、毎日、読売の主要紙の他に、広島で発行されている中国新聞社の協力で、オバマ大統領の広島訪問時の新聞を展示します。この他に米軍がカラーで撮影した廃墟。山端庸介氏が撮影した写真15点も、この中には話題になった黒焦げとなった少年の写真も展示します。原爆で焼き殺された少年の無念さを、写真を通して感じて頂ければと思います。

アメリカで収集した5千枚余りの写真には、廃墟の中にたくましく生きる人々の姿も数多く写されており、この中の感動を与える十五点を展示するコーナーもあります。登録記念物となった4か所の被爆遺跡、ことしは爆心地が追加され5か所が国指定「史跡」となりました。この5カ所を戦前、原爆時、現在の姿とわかりやすく展示します。

「被爆71年　ナガサキ原爆写真展」は8月15日までです。

（副部会長・堀田武弘）

原爆投下翌日の長崎を撮影
山端庸介の「黒こげの少年」に寄せて

昨年（２０１５年）７月、（公財）長崎平和推進協会 写真資料調査部会は被爆70年の節目の年にあたり、長崎市立図書館において「長崎原爆写真展」を開催した。展示の中には、アメリカ国立公文書館から持ち帰った初公開の写真や爆心地を中心に半径２キロメートルを俯瞰できる長さ５メートルの焼け野原のパノラマ写真などがあった。

連日、大勢詰め掛けた来場者の中に２人の老姉妹がいた。会場で２人は、ある写真の前で思わず「あっ！これはお兄ちゃんだ！」と声を上げた。

身体を硬直させ凝視する目の前にあったのは「黒こげの少年」の写真。姉妹の兄は谷崎昭治（当時13歳）といい、70年前の原爆投下後から行方不明になっている。姉妹は別れを惜しむように写真を手で撫でながら会場を去ったという。

９月に入ったある日、写真資料調査部会の部屋に姉妹が現れ、私に写真展会場で見た亡き兄と思われるあの「黒こげの少年」の写真を複製してくれと求めた。姉妹は戦時中、撮った兄・昭治さんの入学時と思われる学校での集合写真などを持参。家族写真には昭治さんと姉妹、それに母の姿があった。

「黒こげの少年」は、西部軍の報道班員だった山端庸介氏（1917～1966）が撮影したものでそのネガは東京在住の長男・祥吾氏が保管している。私は、姉妹にその心情を手紙に綴って祥吾氏に写真の複製を求めるようすすめた。

後日、祥吾氏から姉妹に写真が届いた。気のせいか、六つ切り版の写真の少年の顔は明るく見え、姉妹は写真の少年がなお一層兄だと確信したようだった。

（上）昨年の被爆70年ナガサキ原爆写真展会場
（下）山端庸介が撮影した「黒こげの少年」の写真

長年、原爆写真の収集と検証作業に取り組んできた私にとって「黒こげの少年」の写真は、原爆の凄惨さや非人道性を示す貴重な写真の一枚である。私はこの少年が兄・昭治さんなのか調べてみてはどうか、と姉妹に持ちかけた。そして姉妹の委任を受けて、科学的鑑定を依頼することにした。

被爆前、生前の昭治さんの写真と「黒こげの少年」が同一人物であるか、私は日本法医学会理事長で九州大学大学院の池田典昭教授（法医学）に鑑定を依頼した。

また、私とは別にＮＢＣ長崎放送局が山口県土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム名誉館長の松下孝幸氏にも同様の鑑定を依頼。その結果、池田教授は「同一人物の可能性がある」と鑑定。松下氏は「両者が同一人物であると断定するまでには至らなかった。しかし、両者が同一人物であることを否定する積極的な所見も見いだせない。今回の検証方法では両者が同一人物の可能性は高く、両者が同一人物であることを否定できない。」との鑑定結果を出した。池田教授の鑑定書はＡ４、４ページにわた

り、顔面各部位の形態学的な鑑定内容が詳細に記されていた。私は当初「鑑定」は2枚の写真の顔面各部の「相似点」について検証するものと想像していたが、実際は写真のどこに「相違点」が存在するかが重視された。

写真鑑定の次に大切なことは「黒こげの少年」が何故この場所にいたのか、解明することだった。この写真を撮影した山端庸介氏が残した15枚の写真を分析すると、黒こげの焼死体は爆央直下のほか、松山町十字路西角から南・浜口町にかけて数体あったことが確認できる（そこに写っていた遺体のうち、家族と対面できたのは今回を含め2体である）。

爆死した遺体が点在する
原爆投下翌日の松山町交差点付近

下の川電車軌道橋付近を走行中だった電車の乗客が全員側溝に投げ出され遺体が重なりあった写真があるが、靴や衣服の着用が認められ爆心地から近距離であっても屋内か屋外にいたかによって、身体被害の程度に極端な差があることが分かる。

「黒こげの少年」と同一人物の可能性が高いと鑑定された谷崎昭治さんは当時、瓊浦中学校1年。8月9日は1時間目に行われた英語の試験を受けて下校。爆心地に近い岡町の下宿先に帰宅途中被爆したのではと推察されるが勿論、確証はできない。学校から下宿までの距離や下校の時間帯と原爆投下時刻との関連など連想するのみである。しかし、距離や時間からも少年が昭治さんである可能性は低いとは言えないだろう。

さらに姉妹が展示写真を見て、「あっ！お兄ちゃんだ」と叫んで指さした、生活を共にした肉親以外には通じないテレパシーといおうか霊感は無視出来ないと認識した。

この写真のことがマスコミに取り上げられ、私に次のように問いかける人がいる。

質問1．どうして「黒こげの少年」を姉妹の肉親であると認めるのか。

質問2．あなたはこの写真にどうして、こだわるのか。

写真鑑定の経過は述べた通りだが、さらに次のように答えたい。

答1．同一人物に相違ないと言えるのは遺族だけでしょうね。70年のときを経て遺族がひょっこり現れたといっても、にわかに信じがたいのが人情である。私自身まさかと思った。当然、疑念を解消するためにも科学的鑑定の必要性を感じたのである。遺族にとって鑑定など無縁のこと、それでも協力をしてくれ鑑定結果に満足しておられる。

答2．私にとって「黒こげの少年」は宝物に匹敵する。1枚の写真に過ぎないが、原爆とは何か、原爆の非人道性、原爆（核兵器）は人類に何を及ぼしたのか？その答えを「黒こげの少年」写真は代弁している、と。

戦後71年、一貫して叫び続ける被爆者の声…核を減らしましょう、核兵器を廃絶しましょう、長崎を地球最後の被爆地にしましょう。

その声はいつも空に消えて核保有国には届かない。原爆の実相はなかなか伝わらない。5か国だった核保有国はいつの間にかインド・パキスタン・イスラエル・北朝鮮が加わり9か国に増え最悪の状態にある。世界は滅亡に向って進んでいるように見える。

20世紀半ば核時代に突入した人類にとって、核時代を生きる人類にとって核廃絶は悲願である。「黒こげの少年」はそのことを警告する。

私にとって「黒こげの少年」の写真は世界遺産なのである。

（公財）長崎平和推進協会
写真資料調査部会長
深堀　好敏

※なお、今回の鑑定は写真資料調査部会が依頼・関与したものではない。部会長の私が写真の重要性を踏まえ、遺族の承諾を得て鑑定依頼などを行ったことをご了承いただきたい。

高田小学校(長与町)でミニ写真展
職員室前廊下にゆかりの40点展示

写真資料調査部会では小学校で開催するミニ写真展を、初めての試みとして長与町の高田小学校で開きました。長崎市の葉山町・滑石地区に隣接する小学校です。子どもたちに質問しました。

「高田小学校と原爆は関係あると思う？」

低学年の子どもが多かったせいか「原爆は長崎に落とされた、高田小学校とは関係ないよ」と答えました。原爆投下は子どもたちがまだ生まれていない71年前の出来事、子どもたちの中には、おじいちゃんから聞いた、おばあちゃんから聞いたと、原爆に関心がある子どももいました。

高田小写真展会場

展示した40枚余りの写真は高田小学校に関連あるもの、町内にある道ノ尾駅の新旧の駅舎、ホーム、線路。分校時代の高田小学校の校舎。高田小学校に避難した著名な被爆者・福田須磨子さんの写真や著書等です。

「道ノ尾駅」は学校のすぐそばの駅です。「長崎原爆戦災誌」に、

「道ノ尾駅の爆風による被害は、幸いにも、壁が落ちたり窓ガラスが飛散したりした程度で、駅舎は無事であった。これによって、小さい駅舎ながら救援列車の基点となり、また駅前臨時救護所の本拠となり、北部避難ルートの大きな役割を果たした。

道ノ尾駅（昭和50年頃）

道の尾駅には原爆直後から、プラットホームも駅の広場も負傷者でいっぱいだった、といわれるように、重軽傷を問わず、避難する人々が押しかけていた。

最初の救援列車は午後一時半前後のことで、列車が出るたびに減ることは減るが、しばらくすると元のようにふえ、それは夜に入っても続いた。一夜が明けた翌日にしても、それでも何百人かの人が列車が出るたびに減ったり増えたりしながら、次の列車を待ち、救護の手を待っていた。昨日から動けぬ人もおり、すでに死者も出ていた。…」

救護所となった分校時代の高田小学校
（昭和35年頃）

高田小学校は所在地と校舎は被爆当時と変わりましたが、ここも道ノ尾駅と同じような状況でした。浜口町の長崎医大付属医院前で生鮮野菜屋を営んでいた被爆者・福田須磨子宅は、跡形もない廃墟と化しました。住む家を奪われ避難先を探す福田須磨子は、この時を自著「われなお生きてあり」に、

「やっと道ノ尾の長与分校の校庭の傍に来た。樹々の美しい緑を目にした時、急に目まいがして、気が遠くなりそうな自分を感じた。―しっかりせんばー私は自分に言いきかせながら門をくぐった。一歩はいると此処にもまた地獄絵図が展開されていた。校庭にはテントもなく、重傷者がむしろの上にひしめき合うように寝かされ、唸りつづけているのだ。講堂の板の間には真新しいむしろを敷いて二列にずらっと並んで寝ている。…」

長崎新聞社西彼中央支局の犬塚泉記者が取材に来られ、七月二十日の紙面に掲載されました。見出しは「高田小で原爆写真展　堀田さん、救護の歴史も紹介」。高田小は平和教育に積極的、特に平和担当の先生は熱心でした。写真資料調査部会が収蔵ケースに保存している予備の写真が、思いがけなく子ども達のために役立ったようでした。

（副部会長・堀田武弘）